

沙門 日蓮 撰

八十華嚴經六十九に云はく「普賢道ふげんどうに入ることを得て、十法界を了知す」と。法華經第六に云はく「地獄聲、畜生聲、餓鬼聲、阿修羅聲、比丘聲・比丘尼聲ひくしん、天聲てん、声聞聲びやくしぶつ、菩薩聲、仏聲已上十法界の名目なり。」

第一に地獄界とは、觀仏三昧經かんぶつざんまいきょうに云はく「五逆罪を造り、因果を撥無し、大乘を誹謗し、四重禁を犯し、虚しく信施を食する者此の中に墮す阿鼻地獄なり。」正法念經しょうぼうねんきょうに云はく「殺・盜・淫欲・飲酒・妄語の者此の中に墮す大叫喚地獄なり。」正法念經に云はく「昔酒を以て人に与へて酔はしめ、已はつて調戲して之を翫もてあそび、彼をして羞恥せしむるの者此の中に墮す叫喚地獄なり。」。正法念經に云はく「殺生・偷盜・邪淫の者此の中に墮す衆合地獄なり。」

涅槃經に云はく「殺に三種有り、謂はく下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり、乃至下殺の因縁を以て地獄に墮し、乃至具に下の苦を受く」文。

問うて云はく、十惡五逆等を造りて地獄に墮するは世間の道俗皆之を知れり。謗法に依つて地獄に墮するは未だ其の相貌そつみょうを知らず如何。答へて云はく、堅慧菩薩の造・勒那摩提なまだいの訳の究竟くきょう一乘宝性論いちじょうほうしやうろんに云はく「樂ねがつて小法を行じて法及び法師を謗じ如来の教を識らずして、説くこと修多羅そむに乖これきて是真實義いっせんたいと言ふ」文。此の文の如くんば、小乗を信じて真實義と云ひ、大乘を知らざるは是謗法なり。天親菩薩の説、真諦三蔵しんたいの仏性論しんたいに云はく「若し大乘に憎背するは、此は是一闡提いっせんたいの因なり、衆生をして此の法を捨てしむるを為もつての故に」文。此の文の如くんば、大小流布の世に一向に小乗を弘め、自身も大乘に背き人に於ても大乘を捨てしむる、是を謗法と云ふなり。天台大師の梵網經疏ほんもつぎやうしよに云はく「謗けはは是乖背けはの名なり。結かいを是解これとせば理かなに稱ことばはず、言實に当たらず、異解して説く者を皆名づけて謗と為すなり。己が宗に乖くが故に罪を得」文。法華經の譬喩品に云はく「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」文。此の文の意は、小乗の三賢已前、大乘の十信已前、末代の凡夫十惡・五逆・不孝父母・女人等を嫌はず。此等は法華經の名字を聞いて、或は題名を唱へ、一字・一句・四句・一品・一卷・八卷等を受持読誦し、乃至亦上の如く行ぜん人を、隨喜し讚歎する人は、法華經より外、一代の聖教しょうぎやうを深く習ひ義理に達し、堅く大小乗の戒を持てる大菩薩の如き者より勝れて、往生成仏を遂ぐべしと説くを信ぜずして還つて法華經は地住已上の菩薩の為、或は上根上智の凡夫の為にして、愚人・惡人・女人・末代の凡夫等の為には非あらずと言はん者は、即ち一切衆生の成仏の種を断じて阿鼻獄に入るべしと説ける文なり。涅槃經に云はく「仏の正法に於て永く護ご惜しゃく建立こんりゆうの心無し」文。此の文の意は此の大涅槃經の大法、世間に滅尽せんを惜しまざる者は、即ち是誹謗の者なり。天台大師法華經の怨敵を定めて云はく「聞くことを喜

ばざる者を怨と為す」文。謗法は多種なり。大小流布の国に生まれて、一向に小乗の法を学して身を治め大乘に遷らざるは是謗法なり。亦華嚴・方等・般若等の諸大乘經を習へる人も、諸經と法華經と等同の思ひを作し、人をして等同の義を学ばしめ、法華經に遷らざるは是謗法なり。亦 偶 円機有る人の法華經を学ぶをも、我が法に付け、世利を貪るが為に、汝が機は法華經に当らざる由を称して、此の經を捨て權經に遷らしむるは大謗法なり。此くの如き等は皆地獄の業なり。

人間に生ずること過去の五戒は強く、三悪道の業因は弱きが故に人間に生ずるなり。亦当世の人も五逆を作る者は少なく、十悪は盛んに之を犯す。亦 偶 後世を願ふ人の十悪を犯さずして善人の如くなるも、自然に愚痴の失に依って身口は善く意は悪しき師を信ず。但我のみ此の邪法を信ずるに非ず。国を知行する人、人民を聳めて我が邪法に同ぜしめ、妻子眷屬所 従 の人を以て亦聳め従へ我が行を行ぜしむ。故に正法を行ぜしむる人に於て結縁を作さず。亦民所従等に於ても隨喜の心を至さしめず。故に自他共に謗法の者と成りて、修善止悪の如き人も自然に阿鼻地獄の業を招くこと、末法に於て多分之有るか。

阿難尊者は 淨飯王の甥、斛飯王の太子、提婆達多の舎弟、釈迦如来の従子なり。如来に仕へ奉りて二十年、覺意三昧を得て一代聖教を覺れり。仏入滅の後、阿闍世王、阿難に歸依し奉る。仏滅の後四十年の比、阿難尊者一の竹林の中に至るに一の比丘有り。一の法句の偈を誦して云はく、若し人生じて百歳なりとも水の潦涸を見ずんば生じて一日にして之を睹見することを得るに如かず。阿難此の偈を聞き比丘に語りて云はく、此仏説に非ず、汝修行すべからず。爾の時に比丘阿難に問うて云はく、仏説は如何。阿難答へて云はく、若し人生じて百歳なりとも生滅の法を解せずんば、生じて一日にして之を解了することを得んには如かず。此の文仏説なり。汝が唱ふる所の偈は此の文を謬りたるなり。爾の時に比丘、此の偈を得て本師の比丘に語る。本師の云はく、我汝に教ふる所の偈は眞の仏説なり。阿難が唱ふる所の偈は仏説に非ず。阿難 年 老衰して言錯謬多し、信ずべからずと。此の比丘亦阿難の偈を捨て、本の謬りたる偈を唱ふ。阿難又竹林に入りて之を聞くに、我が教ふる所の偈に非ず。重ねて之を語るに比丘信用せざりき等云云。仏の滅後四十年にさへ既に謬り出来せり。何に況んや仏の滅後既に二千余年を過ぎたり。仏法天竺より唐土に至り、唐土より日本に至る。論師・三蔵・人師等伝来せり、定めて謬り無き法は万が一なるか。何に況んや当世の学者偏執を先と為して我慢を挿み、火を水と争ひ之を糾さず。 偶 仏の教への如く教へを宣ぶる学者をも之を信用せず。故に謗法ならざる者は万が一なるか。

第二に餓鬼道とは、正法念經に云はく「昔財を貪りて屠殺する者此の報いを受く」と。亦云はく「丈夫自ら美食を噉ひ妻子に与へず。或は婦人自ら食して夫子に与へざるは此の報いを受く」と。亦云はく「名利を貪るが為に不淨説法する者此の報いを受く」

と。亦云はく「昔酒を^う酤るに水を加ふる者、此の報いを受く」と。亦云はく「若し人勞して少しく物を得たるを^{あうわく}誑惑して取り用ふる者、此の報いを受く」と。亦云はく「昔行路の人病苦ありて疲極せるに、其の^{ひごく}売を^{うりもの}欺き取り、^{あたい}直を^{あざむ}与ふること薄少なりし者、此の報いを受く」と。亦云はく「昔^{けいごく}刑獄を^{つかさどり}典主、人の^{おんじき}飲食を取りし者此の報いを受く」と。亦云はく「昔^{おんりょうじゆ}陰涼樹を^き伐り、及び衆僧の^{きぼう}園林を^{おんかん}伐りし者、此の報いを受く」文。法華經に云はく「若し人信ぜずして此の^{きぼう}経を^{おんかん}毀謗せば 常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く余の^{しやたく}惡道に^{けんどん}在ること、己が^{ちゅうとう}舍宅の如し」文。慳貪・偷盜等の罪に依って餓鬼道に墮することは世人知り易し。^{けんどん}慳貪等無き諸の善人も^{しんごん}謗法に依り亦謗法の人に^よ親近し自然に其の義を信ずるに依って餓鬼道に墮することは、智者に非ざれば之を知らず。能く能く恐るべきか。

第三に畜生道とは、^{くちむざん}愚痴無慚にして^{いたずら}徒に^{つくな}信施の他物を受けて之を^だ償はざる者此の報いを受くるなり。法華經に云はく「若し人信ぜずして此の^だ経を^だ毀謗せば 当に畜生に墮すべし」文。^{已上三惡道なり。}

第四に修羅道とは、^{しかん}止觀の一に云はく「若し其の心念々に常に彼に勝らんことを欲し、耐へざれば人を下し他を^{かる}輕しめ己を^{たつと}珍ぶこと^{とび}鷄の高く^み飛びて視下ろすが如し。而も外には仁・義・礼・智・信を^あ揚げて下品の善心を起こし阿修羅の道を行ずるなり」文。

第五に人道とは、報恩經に云はく「三歸五戒は人に生ず」文。

第六に天道とは、二有り。欲天には十善を持ちて生じ、^{しき}色・^{むしきてん}無色天には^{そく}下地は^く麤・^{しょう}苦・^{しょう}障、^{じょう}上地は^{みょう}靜・^り妙・^り離の六行觀を以て生ずるなり。

問うて云はく、六道の生因は是くの如し。^{そもそも}抑同時に五戒を持ちて人界の生を受くるに何ぞ^{しょうもう}生盲・^{るう}聾・^{いんあ}瘡癩・^{ざる}瘞陋・^{れんびやく}癩躄・^{はいう}背偻・^{びんぐ}貧窮・^{たびょう}多病・^{しんに}瞋恚等無量の差別有りや。答へて云はく、大論に云はく「若しは衆生の眼を破り、若しは衆生の眼を^{くじ}屈り、若しは正見の眼を破り、罪福無しと言はん。是の人死して地獄に墮し、^{あわ}罪畢りて人と為り、生れてより^{めしい}盲なり。若しは復仏塔の中の火珠及び諸の灯明を盗む。是くの如き等の種々の先世の業因縁をもて眼を失ふ 聾とは是先世の因縁、師父の教訓を受けず行ぜず、而も反って瞋恚す。是の罪を以ての故に聾となる。復次に衆生の^き耳を破り、若しは衆生の^き耳を破り、若しは^{ふくでん}仏塔・^{かんち}僧塔・^{りょう}諸の善人福田の中の^{ばい}榘稚・^{つづみ}鈴・貝及び鼓を盗む。故に此の罪を得るなり。先世に他の舌を破り、或は其の口を塞ぎ、或は^{ふさ}惡薬を^{ふさ}与へて語ることを得ざらしめ、或は師の教へ、父母の^{きょうちよく}教勅を聞き其の語を断つ 世に生まれて人と為り唾にして言ふこと能はず 先世に他の坐禅を破り、坐禅の^{いえ}舍を破り、諸の^{じゅじゅつ}呪術を以て人を呪して^{いか}瞋らし鬪争し^あ姪欲せしむ。今世に諸の^あ結使^あ厚重なること、^{どうでん}婆羅門の^{つま}其の^{らぎょう}稲田を失ひ其の^{あらかん}婦復死して即時に^{びやくしぶつ}狂発して^な裸形にして^な走りしが如くならん 先世に^な仏・^な阿羅漢・^な辟支仏の^な食及び父母所親の^な食を^な奪へば、^な仏世に^な値ふと雖も^な猶故^な飢渴す。罪の重きを以ての故なり 先世に^{べんじょう}好んで^{こうりょう}鞭杖・^{へいけい}拷掠・閉繫を行じ種々に悩ますが故に今

世に病を得るなり 先世に他の身を破り、其の頭を截り、其の手足を斬り、種々の身分を破り、或は仏像を壊り、仏像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀り、或は父母の形像を破る。此の罪を以ての故に形を受くるに多く具足せず。復次に不善法の報い、身を受くること醜陋なり」文。法華經に云はく「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば 若し人と為ることを得ては諸根闇鈍にして盲・聾・背偃ならん 口の氣常に臭く、鬼魅に著せられん。貧窮下賤にして人に使はれ、多病瘠瘦にして依怙する所無く 若しは他の叛逆し抄劫し竊盜せん。是くの如き等の罪 横に其の殃に羅らん」文。又八の卷に云はく「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出ださん。若しは実にもあれ若しは不実にもあれ、此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑すること有らん者は当に世々に牙齒疎き欠け・醜き脣平める鼻・手脚繚戾し、眼目角睐に身体臭穢・惡瘡・膿血・水腹・短氣諸の惡重病あるべし」文。

問うて云はく、何なる業を修する者が六道に生じて其の中の王と成るや。答へて云はく、大乘の菩薩戒を持して之を破る者は色界の梵王・欲界の魔王・帝釈・四輪王・禽獸王・閻魔王等と成るなり。心地觀經に云はく「諸王の受くる所の諸の福樂は、往昔曾て三つの淨戒を持ち、戒德薰修して招き感ずる所にして、人天の妙果として王の身を獲たり。 中品に菩薩界を受持すれば、福德自在の轉輪王となり、心の所作に随ひて 尽く皆成じ、無量の人天悉く 遵奉せん。下の上品に持すれば大鬼王となり、一切の非人 咸く率伏せん。戒品を受持して欠犯すと雖も、戒の勝るゝに由るが故に王と為ることを得るなり。下の中品に持すれば禽獸の王となり、一切の飛走皆歸伏せん。清淨の戒に於て欠犯有るも戒の勝るゝに由るが故に王と為ることを得るなり。下の下品に持すれば、琰魔王として地獄の中に処して常に自在なり、禁戒を毀り惡道に生ずと雖も、戒の勝るゝに由るが故に王と為ることを得るなり 若し如来の戒を受けざること有らば、終に野干の身をも得ること能はず。何に況んや、能く人天の中の最勝の快樂を感じて、王位に居せんをや」文。安然和尚の広釈に云はく「菩薩の大戒は持して法王と成り、犯して世王となる。而も戒の失せざること譬へば金銀を器と為すに用ふるに貴く、器を破りて用ひざるも而も宝は失せざるが如し」と。亦云はく「無量壽觀に云はく、劫初より已來八万の王有りて其の父を殺害すと。此則ち菩薩戒を受け国王と作ると雖も、今殺の戒を犯して皆地獄に墮すれども、犯戒の力も王と作るなりと。大仏頂に云はく、発心の菩薩罪を犯せども、暫く天神地祇と作ると。大隨求に云はく、天帝命尽きて 忽ち驢の腹に入れども、隨求の力に由って還って天上に生ずと。尊勝に云はく、善住天子死後七返、応に畜生の身に墮すべきを尊勝の力に由って還って天の報を得たりと。昔国王有り千車をもって水を運び、仏塔の焼くるを救ふ。自ら 憍心を起こして修羅王と作る。昔梁の武帝五百の袈裟を須弥山の五百の羅漢に施す。誌公往いて五百に施すに一を欠く。衆の云はく、罪を犯すも暫く人王と作らんと。即ち武帝是なり。昔国王有りて民を治むること等しからず。今天王と作れども大鬼王と為る。即ち東南西の三天王是なり。拘留孫の

末に菩薩と成りて発誓し現に北王と作る、毘沙門是なり」云云。是等の文を以て之を思ふに、小乗戒を持して破る者は六道の民と作り、大乘戒を破する者は六道の王と成り、持する者は仏と成る是なり。

第七に声聞道とは、此の界の因果をば阿含小乗十二年の經に分明に之を明かせり。諸大乘經に於ても大に対せんが為に亦之を明かせり。声聞に於て四種有り。一には優婆塞、俗男なり。五戒を持し苦・空・無常・無我の觀を修し、自調自度の心強くして敢へて化他の意無く、見思を断尽して阿羅漢と成る。此くの如くする時自然に髪を剃るに自ら落つ。二には優婆夷、俗女なり。五戒を持し髪を剃るに自ら落つること男の如し。三には比丘僧なり、二百五十戒具足戒を持して苦・空・無常・無我の觀を修し、見思を断じて阿羅漢と成る。此くの如くするの時、髪を剃らざれども生ぜず。四には比丘尼なり。五百戒を持す、余は比丘の如し。一代諸經に列座せる舍利弗・目連等の如き声聞是なり。永く六道に生ぜず、亦仏・菩薩とも成らず、灰身滅智し決定して仏に成らざるなり。小乗戒の手本たる尽形寿の戒は、一度依身を壞れば永く戒の功德無し。上品を持すれば二乗と成り、中下を持すれば人天に生じて民と為る。之を破れば三惡道に墮して罪人と成るなり。安然和尚の広釈に云はく「三善の世戒は因生じて果を感じ業尽きて惡に墮す。譬へば楊葉の秋至れば金に似たれども、秋去れば地に落つるが如し。二乗の小戒は持する時は果拙く破する時は永く捨つ。譬へば瓦器の完くして用ふるに卑しく、若し破れば永く失するが如し」文。

第八に緣覺道とは、二有り。一には部行獨覺、仏前に在りて声聞の如く小乗の法を習ひ、小乗の戒を持し、見思を断じて永不成仏の者と成る。二には麟喩獨覺、無仏の世に在りて飛花落葉を見て苦・空・無常・無我の觀を作し、見思を断じて永不成仏の身と成る。戒も亦声聞の如し。此の声聞緣覺を二乗とは云ふなり。

第九に菩薩界とは、六道の凡夫の中に於て、自身を輕んじ他人を重んじ、惡を以て己に向け善を以て他に与へんと念ふ者有り。仏此の人の為に諸の大乘經に於て菩薩戒を説きたまへり。此の菩薩戒に於て三有り。一には撰善法戒、所謂八万四千の法門を習ひ尽くさんと願す。二には饒益有情戒、一切衆生を度しての後に自らも成仏せんと欲する是なり。三には、撰律儀戒、一切の諸戒をことごとく持せんと欲する是なり。華嚴經の心を演ぶる梵網經に云はく「仏諸の仏子に告げて言はく、十重の波羅提木叉有り。若し菩薩戒を受けて此の戒を誦せざる者は菩薩に非ず、仏の種子に非ず、我も亦是くの如く誦す。一切の菩薩は已に學し、一切の菩薩は當に學し、一切の菩薩は今學す」文。菩薩と言ふは二乗を除きて一切の有情なり。小乗の如きは戒に隨ひて異なるなり。菩薩戒は爾らず。一切の有心に必ず十重禁等を授く。一戒を持するを一分の菩薩と云ひ、具に十分を受くるを具足の菩薩と名づく。故に瓔珞經に云はく「一分の戒を受くること有れば一分の菩薩と名づけ、乃至二分・三分・四分・十分なるを具足の受戒という」文。

問うて云はく、二乗を除くの文如何。答へて云はく、梵網經に菩薩戒を受くる者を列ねて云はく「若し仏戒を受くる者は国王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼・十八梵天・六欲天子・庶民・黄門・姪男・姪女・奴婢・八部・鬼神・金剛神・畜生乃至變化人にもあれ、但法師の語を解するは 尽 く戒を受得すれば皆第一清淨の者と名づく」文。此の中に於て二乗無きなり。方等部の結經たる瓔珞經にも亦二乗無し。

問うて云はく、二乗所持の不殺生戒と菩薩所持の不殺生戒と差別如何。答へて云はく、所持の戒の名は同じと雖も、持する様並びに心念永く異なるなり。故に戒の功德も亦浅深有り。

問うて云はく、異なる様如何。答へて云はく、二乗の不殺生戒は永く六道に還らんと思はず、故に化導の心無し。亦仏菩薩と成らんと思はず、但灰身滅智の思ひを成すなり。譬へば木を焼き灰と成しての後に一塵も無きが如し。故に此の戒をば瓦器に譬ふ。破れて後用ふること無きが故なり。菩薩は爾らず。饒益有情戒を發こして此の戒を持するが故に、機を見て五逆十惡を造り同じく犯せども此の戒は破れず、還つて 彌 戒体を全くす。故に瓔珞經に云はく「犯すこと有れども失せず、未來際を尽くす」文。故に此の戒をば金銀の器に譬ふ。完くして持する時も破する時も永く失せざるが故なり。

問うて云はく、此の戒を持する人は幾劫を経てか成仏するや。答へて云はく、瓔珞經に云はく「未だ住に上らざる前 若しは一劫二劫三劫乃至十劫を経て初住の位の中に入ることを得」文。文の意は凡夫に於て此の戒を持するを信位の菩薩と云ふ。然りと雖も一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し、十劫を経て不退の位に入り永く六道の苦を受けざるを不退の菩薩と云ふ。未だ仏に成らず、還つて六道に入れども苦無きなり。

第十に仏界とは、菩薩の位に於て四弘誓願を發すを以て戒と為す。三僧祇の間六度万行を修し、見思・塵沙・無明の三惑を断尽して仏と成る。心地觀經に云はく「三僧企耶大劫の中に具に百千の諸の苦行を修し、功德円満して法界に遍く、十地究竟して三身を証す」文。「因位に於て諸の戒を持ち、仏果の位に至りて仏身を莊嚴す」文。三十二相・八十種好は即ち是戒の功德の感ずる所なり。但し仏果の位に至れば戒体失す。譬へば華の果と成りて華の形無きが如し。故に天台の梵網經疏に云はく「仏に至りて乃ち廃す」文。

問うて云はく、梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れると並びに決定性の二乗とを許すや。答へて云はく、梵網經に云はく「若し戒を受けんと欲する時は、師心に問ひ言ふべし。汝現身に七逆の罪を作らざるや、菩薩の法師は七逆の人の与に現身に戒を受けしむることを得ず」文。此の文の如くんば七逆の人は現身に受戒を許さず。大般若經に云はく「若し菩薩設ひ菟伽沙劫に妙の五欲を受くるとも、菩薩戒に於ては猶犯と名づけず。若し一念二乗の心を起こさば即ち名づけて犯と爲す」文。大莊嚴論に云はく「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障へず、若し自利の心を起こさば是大菩提の障りなり」文。此等の文の如くんば六凡に於ては菩薩戒を授け、二乗に於ては制止を加ふる者なり。二

乗戒を嫌ふは二乗所持の五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌ふに非ず。彼の戒は菩薩も持すべし。但二乗の心念を嫌ふなり。

夫^{それおもんみ}以れば持戒は父母・師僧・国王・主君・一切衆生・三宝の恩を報ぜんが為なり。父母は養育の恩深し。一切衆生は互ひに相助くる恩重し。国王は正法を以て世を治むれば自他安穩なり。此に依って善を修すれば恩重し。主君も亦彼の恩を蒙^{こうむ}りて父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を養ふ。設^たひ爾^{しか}らずと雖も一身を顧^{かえり}みる等の恩是重し。師は亦邪道を閉じ正道に趣^{おもむ}かしむる等の恩是深し。仏恩は言ふに及ばず。是くの如く無量の恩分^{これ}之有り。而るに二乗は此等の報恩皆欠けたり。故に一念も二乗の心を起こすは十悪五逆に過ぎたり。一念も菩薩の心を起こすは一切諸仏の後心の功德を起こせるなり。已上四十余年の間の大小乗の戒なり。

法華經の戒と言ふは二有り。一には相待妙^{そうたい}の戒、二には絶待妙^{ぜつたい}の戒なり。先づ相待妙の戒とは、四十余年の大小乗の戒と法華經の戒と相對して爾前を麁戒と云ひ法華經を妙戒と云ふ。諸經の戒をば未顯^{みけんしんじつ}眞実の戒・歴劫修行の戒・決定性の二乗戒と嫌ふなり。法華經の戒は眞実^{そくしつとんじょう}の戒・速疾頓成の戒・二乗の成仏を嫌はざる戒等を相對して麁妙を論ずるを相待妙の戒と云ふなり。

問うて云はく、梵網經に云はく「衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る。位大覺に同じ已に眞に是諸^{みこ}仏の子なり」文。華嚴經に云はく「初發心の時便^{けごん}ち正覺を成ず」文。大品經に云はく「初發心の時即ち道場に坐す」文。此等の文の如くんば四十余年の大乘戒に於て法華經の如く速疾頓成の戒有り。何ぞ但歴劫修行の戒なりと云ふや。答へて云はく、此に於て二義有り。一義に云はく、四十余年の間に於て歴劫修行の戒と速疾頓成の戒と有り。法華經に於ては但一つの速疾頓成の戒のみ有り。其の中に於て、四十余年の間の歴劫修行の戒に於ては、法華經の戒に劣ると雖も、四十余年の間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ。故に上に出だす所の衆生、仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る等の文は、法華經の「須臾聞之、即得究竟^{しゅゆもんしそくとくきょう}」の文に之同じ。但し無量義經に四十余年の經を挙げて歴劫修行等と云へるは四十余年の内の歴劫修行の戒計りを嫌ふなり。速疾頓成の戒をば嫌はざるなり。一義に云はく、四十余年の間の戒は一向に歴劫修行の戒、法華經の戒は速疾頓成の戒なり。但し上に出す所の四十余年の諸經の速疾頓成の戒に於ては、凡夫地より速疾頓成するに非ず。凡夫地より無量の行を成じて無量劫を^へ經、最後に於て凡夫地より即身成仏す。故に最後に從へて速疾頓成とは説くなり。委悉に之を論ぜば歴劫修行の所撰なり。故に無量義經には總て四十余年の經を挙げて、仏、無量義經の速疾頓成^{せんぜつぼさつりゃっこうしゅぎょう}に対して宣説菩薩歴劫修行と嫌ひたまへり。大莊嚴菩薩此の義を承けて領^{だいじょうごんぼさつ}解^うて云はく「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に無上菩提を成ずることを得^{りょう}ず。何を以ての故に、菩提の大直道を知らざるが故に、險徑を行くに留難多きが故に。乃至大直道を行くに留難無きが故に」文。若し四十余年の間に無量義經・法華經の如く速疾頓成の戒之有れば、仏猥りに四十余年の実義を隠したまふの失^{みだ}之有らん云云。二義

の中に後の義を作る者は存知の義なり。相待妙の戒是なり。

次に絶待妙の戒とは、法華經に於て別の戒無し。爾前の戒即ち法華經の戒なり。其の故は、爾前の人天の楊葉戒、小乘阿含經の二乗の瓦器戒、華嚴・方等・般若・觀經等の歴劫菩薩の金銀戒の行者、法華經に至りて互ひに和会して一同と成る。所以に人天の楊葉戒の人は、二乗の瓦器・菩薩の金銀戒を具し、菩薩の金銀戒に人天の楊葉・二乗の瓦器を具す。余は以て知んぬべし。三悪道の人^{そつたい}は現身に於て戒無し。過去に於て人天に生まれし時、人天の楊葉・二乗の瓦器・菩薩の金銀戒を持ち、退して三悪道に墮す。然りと雖も其の功德未だ失せずして之有り。三悪道の人、法華經に入る時、其の戒之を起こす。故に三悪道にも亦十界を具す。故に爾前の十界の人、法華經に来至すれば皆持戒なり。故に法華經に云はく「是を持戒と名づく」文。安然和尚の広釈に云はく「法華に云はく、能く法華を説く是を持戒と名づく」文。爾前經の如く師に隨ひて戒を持せず、但此の經を信ずるが即ち持戒なり。爾前の經には十界互具を明かさず。故に菩薩無量劫を経て修行すれども、二乗・人天等の余戒の功德無く、但一界の功德を成ず。故に一界の功德を以て成仏を遂げず、故に一界の功德も亦成ぜず。爾前の人法華經に至りぬれば余界の功德を一界に具す、故に爾前の經即ち法華經なり、法華經即ち爾前の經なり。法華經は爾前の經を離れず、爾前の經は法華經を離れず、是を妙法と言ふ。此の覺り起こりて後は、行者、阿含小乘經を読むも即ち一切の大乗經を讀誦し法華經を読む人なり。故に法華經に云はく「声聞の法を決了すれば是諸經の王なり」文。阿含經即ち法華經と云ふ文なり。「一仏乘に於て分別して三と説く」文。華嚴・方等・般若・即ち法華經と云ふ文なり。「若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんも皆正法に順ず」文。一切の外道・老子・孔子等の經は、即ち法華經と云ふ文なり。梵網經等の權大乘の戒と法華經の戒と多くの差別あり。一には彼の戒は二乗七逆の者を許さず。二には戒の功德に仏果を具せず。三には彼は歴劫修行の戒なり。是くの如き等多くの失有り。法華經に於ては二乗七逆の者を許す上、博地の凡夫一生の中に仏位に入り、妙覺に至りて因果の功德を具するなり。

四月二十一日

日 蓮 花 押